

doi: 入りたり。

といふ風の意味になつて来る。そこで、磨滅した文字を想像的に之に添へると、「：（我は部下を）率ゐ、大海（を渡り）：：：闕ひ：：（此洞穴に）入つた：：：」といふ意味の纏つた文句となるといふのである。^(三三) 假りに此解釋を間違つてゐるとしても、トルコ文字が我邦に極めて古い時代に入つてゐたことだけは明らかである。また鳥居博士は此洞穴を調査して十七字を得、それをイニッセイやオルホンで發見せられた突厥文字に比較した結果、此古い銘文は横に讀むべきものであることを主張してゐられる。これらの文字は大陸から直接に北海道に移住したツングース^(三三)が彫刻したもので、場所は墓場であり、時代は紀元七世紀の中葉以前であつたと思はれる。これらのことから考へても、忘れられた交通線がいくつもあつて、其上を遠い邦々の文化が這つて來たといふことは想像される。日本文化を複合的だといふ私の主張は、かうした遺物や傳説によつて益、深められ、益、強められてゆくのを覺える。

文字は一切文化の代表であつた。文字さへもかうした複雑な要素を有つてゐるのであるから、他の物質文化の要素の複雑はそれを推測するに難くはない。金屬工業、機械業、其他一々について述べたならば、云ひ知れぬ愉快があるのであるけれど、こゝ

鳥居博士の研究

文字は文化の象徴

には文字を以てそれを象徴するだけに止めて置かう。

- (一)『日本書紀』卷九、神功皇后五年。——「饒津彦……乃詣新羅。次千羅講津。拔草羅城。還之。是時、倭人等、今桑原、佐藤、高宮、忍海、凡四邑、漢人等始祖也。」
- (二)同上、六十二年の註。——「百濟記曰。壬午年。新羅不奉貴國。貴國遣沙至比跪令討之。」
- (三)同上、卷十一、仁德天皇五十三年。——「田道連精騎擊其左。新羅軍潰之。……卽虜四邑之人民。以歸焉。」
- (四)同上、卷十、應神天皇十四年。——「弓月君自百濟來歸。因以奏之曰。臣領已國之人夫百二十縣。而歸化。然因新羅人之拒。皆留加羅國。爰遣葛城、饒津彦。而召弓月之入夫於加羅。然經三年。而饒津彦不來焉。」
- (五)同上、十六年。——「八月。遣平群木菟宿禰。的戶田宿禰於加羅。……乃率弓月之人夫。與饒津彦共來焉。」
- (六)同上、二十年。——「九月。倭漢直祖阿知使主。其子都加使主。并率已之黨類十七縣。來歸焉。」
- (七)同上、三十七年。——「遣阿知使主。都加使主。於吳。令求縫工女。爰阿知使主等。渡高麗國。欲達于吳。則至高麗。更不知道路。乞知道者於高麗。高麗王乃副。久禮波。久禮志二人。爲導者。由是得通吳。」
- (八)同上、十五年。——「百濟王遣阿直岐。」

(九)同上、十六年。——「春二月。王仁來之」。
(一〇)同上卷十九、欽明天皇元年。——「二月百濟人已知部投化。置倭國添上郡山村。今山村、已知部之先也」。

(一一)同上。——「八月……召集秦人。漢人等諸蕃投化者。安置國郡。編貫戶籍。秦人戶數惣七千五十三戸」。

(一二)同上、卷十七、繼體天皇三年。——「括出在任那日本縣邑百濟百姓浮逃絶貫三四世者。並遷百濟附貫也」。

(一三)『古事記』中卷、應神天皇の條參照。

(一四)『日本書紀』卷十二、履仲天皇四年秋八月の條參照。

(一五)本書第六章第三節及び第四節參照。

(一六)『續博物志』——「倭辰餘國。或橫書。或左書。或結繩。或鑿木。唯高句麗。摹寫韻法。取正中華」。

(一七)村尾元長氏『アイヌ風俗略志』參照。

(一八)矢袋喜一氏『琉球古來の數學』參照。

(一九)『本朝書籍目錄』『羣書類從』卷第四百九十五、九一七頁參照。

(二〇)久米博士『日本古代史』下卷、一一六頁參照。

(二一) Dr. R. Torii: "Les Aïmori des Iles Louriès," pp. 303, 304.

(二二)中目覺氏『小權の古代文字』二九—三六頁參照。

(二三)『日本書紀』の齋明紀などに現はれてゐる肅慎といふのは、これらのツングースを目したものであることが知られる。

第五節 神話の進化

具體的に生きて、抽象的に生きることの出来なかつた原始民衆の間では、彼等がどんなに驚異し、恐怖し、感動しても、それらの意識作用を起さしめた對象について、其起原、存在、發達を抽象的に解釋することが出来よう筈がない。青く澄んだ空、深く湛へる水、繁る木、花咲く草、鳥の歌、蝶の舞、大地を搖がすやうな大風、人の目を眩ます電光——かうした自然の現象は、彼等に取つて驚異であり、怪訝であり、恐怖であつたに相違ない。そこから自然科學が起り、自然宗教が起つたのであつた。「神の出現と其性質、地球の創造、祭式の理由など、さうしたことは神話で説明されてゐるが、これらの事柄は同時に比較宗教學でも取扱はれるから、神話學と比較宗教學とは屢同時に同一現象を考へる。神話學は、かるが故に、宗教學の一部である」と碩學スベンス(Spence)は説いてゐるけれども、私は神話は自然科學の基礎であつて、宗教學の一部をなすものではないと思はれる。神話は智的に現象を解釋しようとし、宗教は

神話と宗教との交渉

スベンスの考へ

情的に現象を信仰しようとしたもので、其間には、似てゐながらも、若干の差異が横はつてゐなければならなかつた。

混沌

かうした前提で『日本書紀』の神話を見る時、それが『古事記』よりも原始的でないことに氣づくであらう。前者では混沌 (Chaos) を説いてゐるけれど、後者ではそれが臙ろけになつて居り、臙ろけなだけそれだけそこに日本神話の純眞が現はれてゐる。アミノミナカヌシは太初に出来た神であるといふが、「主」の觀念は所有權の投影であり、君主の反映であるが故に、餘程後から絡みついた贅疣であらねばならない。タカミムスビ、カミムスビは産出力の神格化であつて、こゝには生産 (Fertility) を生命とする農業時代の香氣がある。ウマシアシカビヒコチもさうである。アミノトコタチ、クニノトコタチは天地を系統化し、トヨクモヌは産出力の作用を具體化し、其後に現はれたウヒチニとスヒチニ、ツヌグヒとイクグヒ、オフトノヂとオフトノベ、オモダルとアヤカシコネとは、段々に自然から人類に近づいて來て、最後に現はれたイザナギ、イザナミの二神に至つて、初めて生殖作用を營まれたといふ筋になつてゐる。だから、私はイザナギ、イザナミ以前は後世の添加であつて、二神以後が日本神話の原型であると考へたいのである。

産出力の神格化

不完全兒神話

卵生神話

琉球神話

イザナギ、イザナミ二神の創造の説話は、後から餘程誇張され、變形されたもので、元はもつと單純な形を有つてゐたであらう。二神の間に生れたヒルコが三歳になつても足腰が立たぬので、葦船に入れて大海に放流したといふ一節は、インドネジャ族の間に多い不完全兒神話に似てゐる。インドネジャ族は、血液と同時に彼等の神話をも日本群島に輸入したと思はれるが、其神話の特徴である卵生神話は、日本神話に於いては本筋とならずに、開闢神話中に譬喩となつて入つたり、移住神話中に挿話となつて入つたりしてゐるだけである。然るに高句麗^(五)だの、百濟^(六)だのでは、これが國王の祖先の物語となつてゐる。卵生神話の古代に於ける分布の知られたる最北端は蒙羅^(七) (Dauri Khor) —— 扶餘の一部族で滿洲の中部に住んでゐるもの、今日ではダウリ (Dauri) と呼ばれてゐる—— であるところなどを思ふと、それが南方系統であるか、北方系統であるかはよく分らない。けれども、此神話にはいつも日光を伴つてゐるので、何となく南方系統らしく思はれる。民間説話の一つである暖風懷胎説話の如きも、日光托胎説話と同一基礎の上に築かれたもので、起原は卵生神話と同じことに相違ない。いづれにしても、イザナギ、イザナミ、兩神の創造神話は、細部を除いては餘程古い形式のもので、原日本人型ともいふべきものであらうことは、長い間、同じ人種で

『アリキエ
トノオモ
ロ』

ありながら懸け離れて、殆ど全く異つた生活を生活してゐた琉球に残つてゐる開闢神話によつて證明することが出来る。それは『アリキエトノオモロ双紙』の二番目の『昔

- 始みからぬ節』と題するオモロである。
- 昔、初まりや (Mmkashi hajimari ya)
- てらく大主や、 (Teraku ufunushi ya)
- てらや照りのわり、 (Teraya teri yuwari)
- しぬみ初まりに、 (Shinumi hajimari ni)
- てらいちゆるくが、 (Terai chiyuruku ga)
- てらわちゆるくが、 (Terawa chiyuruku ga)
- うさむしち見りば、 (Usam shichi miriba)
- さゆくしち見りば、 (Sayuku shichi miriba)
- あまみきよわ、 (Amami kiyo wa)
- ゆしわちえ、 (Yushi wachie)
- しねりきよわ、 (Shineri kiyo wa)
- ゆしわちえ、 (Yushi wachie)

ア
イ
ミ
キ
ヨ
と
ミ
ネ
リ
キ

- 島あゆみの (Shima chiyukuri)
- つじ、わちえ、 (Tte wachie)
- 國あゆみの (Kuni chiyukuri)
- つじ、わちえ、 (Tte wachie)
- くくろあな、 (Kkuraginu)
- 島々、 (Shima shima)
- くくろあな、 (Kkuraginu)
- 國々、 (Kuni kuni)
- 島あゆみの (Shima chiyukura)
- ぐわみむ、 (Gwa mimu)
- 國あゆみの (Kuni chiyukura)
- ぐわみむ、 (Gwa mimu)
- てらく、てらあらの (Teraku urakirite)
- しむみ、うらあらの (Shinumi urakirite)
- あまみや、 (Amamiya)

すざ、生すな。(Suza nasuna)

しねりや。(Shineri ya)

すざ、生すな。(Suza nasuna)

然りば。(Sariba)

すざ、生それ。(Suza nasore)

現代語譯

之を現代語に譯すると、「太古、初めに、日輪の大神が照り輝いてゐた。日輪の大神の初めに、日の神が、日の神が見遙かし、俯し眺めて、アマミキヨを、召し出し、シネリキヨを、召し出し、島造りを、命じ、國造りを、命じ、許多の、島々、許多の、國々。島を造り、終るまで、國を造り、終るまで、日の神は待ちかね、待ちかねていつた、「アマミよ、神を生むな。シネリよ、神を生むな。さらば、人を生め」と。』といふ意味である。アマミキヨとシネリキヨとはイザナギ、イザナミに相當してゐる。初め國土山川が出来、それから神々が造られ、人類が造られてゆくといふところに興味と特徴とが横はつてゐる。

太陽神と暴風神

二神の子の中、アマテラスは太陽神であり、ツクヨミは太陰神であり、スサノヲは暴風神であり、アマテラスとスサノヲとの争ひは、黄帝と蚩尤との争ひ、メヅーサ

日本神話の特徵

風が人の生命の本源

イキとイキル

(Medusa)とアテーネ(Athenae)との關係に似てゐるから、これを自然現象の神格化であるといふ人がある。勿論さうも見えるけれど、日本のアマテラスには濃厚な人間味が現はれてゐて、單純な自然現象の神格化とは思はれない節が多い。世界のどこにも太陽神太陰神はあるが、前者は男性、後者は女性であるに反し、日本では日の神が女性で、月の神が男性であることが興味の中心である。此事は洪水神話に缺けてゐること、共に、たしかに日本神話の二大特徴と云つて差支へのないものである。

アマテラスとスサノヲとが天安河原で盟誓して、相互の品物を交換して子を産む一條の如きは、風或は息が生命の源泉となつてゐる、かうした筋もインドネジャ族の間には珍らしくないことで、一種の氣體的物質を生命の本源とする宗教的信仰の現はれである。南東ボルネオの神話では、始めに二つの卵があつて、それから一對の夫婦が生れて来て、七人の男兒と七人の女兒とを産んだが、其いづれにも生命はなかつた。そこで夫は神から生命を譲り受けるつもりで外出したが、外出してゐる間に妻が夫の命令に反いて、動かしてはならぬ蚊帳を牽けて外を眺めたので、隙間から風が吹き入つて、生命のない子供らを掠めた。と、彼等は風を吸つて生命を得たとある。「呼吸」を意味する日本語イキが働いて、イキルといふ動詞になつてゐることを思へば、生命の

人類起原神話

本源を風と見た色々の説話の出たことは不思議でない。

開闢神話にも優つて大事なのは、人類起原神話であるが、日本神話ではこれが天降神話の性質を帯んでゐる。高天原——天上の人——といふ觀念は、インドネジャ族の間には可也に廣く分布してゐて、人類は(イ)天界から降つて来たとか、(ロ)神の末裔であるとか、(ハ)不思議の種子から湧いて出たとか、三種の中いづれかの形式を取つてゐる。人類の起原を天界に求める信仰は、セラム(Ceram)、カイ(Kai)、テニムル(Tenimber)などにあり、中でもカイ群島には詳細な物語が語り傳へられる。それによつて、先祖は天から降つて来たが、天は初めもつと地に接近してゐたので、木或は蔓に縋つて降りて来たといふのである。此信仰はまたスマトラに近いニヤ群島の土人の間にも流布してゐる。人類を神裔と考へるものは比較的少ないが、トバ・バタック(Toba Batak)の間では、人類は地に降つた女神と、女神について来た天の英雄との間に造られたものだと思はれてゐる。南部セレベスに於いては、マカッサルのブキ族(Bugis)は、自分達を天神の子と其六人の妻との間に出来た子の末裔であると信じてゐる。然るにニヤ島(Nia)及びルゾン島(Luzon)のイフガオ族(Ifugao)の間では人類神裔説が盛んに行はれてゐる。これらの二種の神話は、日本にも類似したものがある。

三種のインドネジャ神話と日本

ゲシル・ボグド神話

下界の混亂

エセゲ・マラン

れど、今一つの草木から人間が出来たといふ神話は、民間説話として残つてゐるだけで、『古事記』などには其痕跡しかない。かうした關係から、日本神話を南方系統のものとする學者もあるけれども、天降神話、人祖神裔神話は、必ずしも南方ばかりにあるものでなくて、北方民衆の間にも行はれてゐる。

ゲシル・ボグド(Gesil Bogdo)の説話の如きは、北方に行はれてゐる天降神話の好適例で、それは主としてブリヤート人の間に行はれてゐる。近代的要素も加はつてゐるけれど、人祖神裔の原始形をほめかしてゐるところに興味がある。少し長いけれども、シュレタリョフ(Schretaryoff)の談話に基づいて記載されたものから、次ぎの如く譯出する。

「初め、世界の出来た時、下界は混亂と不秩序とに充たされてゐた。そこには様々の禍災が満ちてゐた、中でもマンガタイ(Mangathais)は特に著しいものであつた。其時、天上で會議が開かれた。四十四柱の東方神の中の一柱、クルムス・テンゲリ(Krumus Tengeri)が云ふには『中の息子は、これらの禍を除き且つ鎮めることが出来る』と。

エセゲ・マラン(Esege Malan)には九人の息子があつた。彼れは其真中の息子を呼

ぶと、其子のゲシル・ボグドが云つた「若し望むことが叶へられるならば、私は地に降つて、悪神らを滅ぼしたい。けれども、九十九柱のテンゲリ達は、私に其秘術の種を授けてくれなければならぬ」と。

秘術の種十萬

テンゲリ達が、其秘術の種十萬を授けたら、ゲシル・ボグドはそれを嚙み下した。嚙み了つてから、彼れはエセゲ・マランの方を向いて、「さあ、此度は貴方の番だ。私に貴方の黒馬と道具とを下さい」と云つたので、エセゲが黒馬と道具とを與へると、更に言葉を續けて、「貴方の環繩と投槍とを下さい」と迫る。エセゲが環繩と投槍とを與へると、ゲシルは一人の妻を求めて、これを得た。彼れは其妻に向つていふには、「お前は三人の娘を持つてゐる。其三人の娘を私にくれ」と。女は初め拒んで云つた。「下界はよくない處。娘らはとても住めない。私は娘をくれることは出来ない」。

と、ゲシル・ボグドは宣言した。「若し望む所が全部叶へられないなら、私は下界へは行くまい」と。

オッコン・テンゲリ

そこで、エセゲ・マランは、オッコン・テンゲリ (Otkon Tengeri) に、「どうすればよいか、與へるか與へないかをトはしめた。オッコンはトつていつた。「娘達はゲシル・ボグドの役に立ちます。是非とも彼等を與へなければなりません」と。

三年間の天上徘徊

母親が三人の娘をゲシル・ボグドに與へると、彼れはエセゲ・マランから與へられたものを皆嚙み下したやうに、娘達をも嚙み下してしまつた。そこで、彼れは別れを告げたが、直ぐ下界へは降らなかつた。彼れは常に下界を見下しつゝ、三年の間天上を廻り歩いた。此三年の間に、彼れはどこに禍があるかを探して、あらゆる悪靈と害神との在所知つた、其時、彼れは「此儘では下界へ行くことが出来ない。私はあの國へ生れなくてはならない」といつた。彼れは六十歳の婦人、名をツムン・ヤリグール (Tumun Yargul) とつて、シンドレイ・ウググン (Sindlei Uggun) の妻である婦人を見て、「私は、あの女の頭の中に入らなくてはならない」と云つた。

ウケゲン

其年、シンドレイ・ウググンは非常に幸福であつた。彼れの家畜は殖ふ、彼れの牧草は繁つた。或日、妻のツムンがいふには、「私は澤山子供が出来たやうな氣がする。子供の話し聲が聞える」と。

悪神マンガタイ

やがて、多数の子供が生れたが、生れ方は皆それと異つて居り、いづれも天へ飛んで行つた。最後に生れた子のいふには、「私が生れたから、これからは澤山の人が生れるだらう」と。其子は瘦せてゐて、見てくれが大變醜かつた。けれども、間もなく變つて、人間の形になつた。此人間が即ちゲシル・ボグドで、あらゆる禍災を祓ひ淨

め、あらゆる悪霊と悪神とを滅ぼした人であつた。彼れに最後に殺された悪霊はルス
グイ・マンガタイ (Iusugui Mangathai) であつた。ゲシル・ボグドが、其悪霊の足を
掴むと、悪霊は指で地を掻き撈つた。と、十筋の流れが湧き出した。それらの流れは
アカ(Aqa)河になつて、アンガラの左岸に注ぎ入る。

其時、ゲシルは云つた。『どれ、横になつて眠らう。誰れも私を起してはならない。
私は此世界に、また多くの禍災、悪霊、悪人の現はれるまで眠り続けよう。そして禍
災が現はれたら起きて、それらを滅ぼさう』と。

ゲシル・ボグドは、天から降る前に、三人の子と、六人の孫とを持つてゐた。昔、こ
れら九人の子孫については、各々九つづ、合せて八十一の物語りがあつて、それを九
組で語り、それが語られる間は、誰れも食つたり飲んだり眠つたりしてはならなかつ
た。そして九組が語り終ると、眼に見えぬ人がいつた。『お前達は、ブフの置き所を忘
れてゐる』と。

ゲシル・ボグドは、コンイン・コトイ (Gonjin Gotoi) で生れた。彼れは日の出 (Quila-
ganá Qoli) に眠る。彼れの寢床は無邊の平岩で、その四周は大きなタイガ (Taiga)
——シベリヤの濕潤な大森林——である。樂に休まうと、彼れが寢返りをすると、大

ゲシルの休
息

九々八十一
の物語

地震

ゲシル神話
と天孫降臨
神話

海幸山幸交
換神話

地が揺れる。ロシア人はそれを『地震』といふけれど、ブリヤートは、それがゲシ
・ボグドの寢返りだといふことを知つてゐる。』

之を我國の天孫降臨の神話に比べると、(一)初めに下界の混亂してゐたことは、葦
原の中つ國に「螢火の輝く神や、狭蠅なす邪しき神」のあつたのに似てゐる。(二)ク
ルムス・テンゲリはタカミムスビの神に似て居り、(三)彼れに下界へ降るべく命ぜら
れたゲシル・ボグドはアメワカヒコであり、其親エセゲ・マランはアマノクニダマであ
る。(四)又ゲシル・ボグドが十萬の祕術の種を授かつたことは、アメワカヒコが天の
鷹弓と天の羽々矢とを授かつたのに類似し、(五)ゲシルが三年間地上に降らなかつた
ことは、アメワカヒコがシタテルヒメに逆上させて、三年間復命しなかつたことに類似
してゐる。此説話はいくつも變形があつて、其各々はいくらかつ日本神話に類似して
ゐる。かう觀て來ると、天降神話は南方系統のものばかりでなく、北方系統のものも
あることが知られる。

かのホノスソリとヒコホデミとが海幸と山幸とを交換したといふ神話は、史學者
によつて屢々山海分治の投影であるとせられ、また海産物と陸産物との交換の反映であ
るとせられたりするが、神話學的に見ればそれはどんな日本の歴史的事實をも反映す

るものでなく、たゞ或場所に廣く分布した一種の復讐神話であることが認められるのみであつた。インドネジャ族の居住區域の最南東端であるカイ群島には、ヒコホホデミの神話によく似た筋を有つた復讐説話が語り傳へられてゐる。^(二六)

ヒヤンとバルバラ

「天上に三人の兄弟と、二人の姉妹とがあつた。或日、末弟のバルバラ (Barbara) が釣りしてゐる中に、長兄のヒヤン (Hian) から借りた釣針を失つてしまつた。長兄は怒つて是非ともそれを見附けて返せと迫つた。末弟はいくら探しても失つた品を見出さなかつたが、ふと一尾の魚に出會つた。其魚は彼れに向つて『何故そんなに心配してゐるか』と尋ね、事情を聞いて非常に同情し、『それでは共に探しませう』と盟つたが、やがて一尾の魚が咽喉に何か物を立て、患つてゐるのを發見した。其咽喉に立つてゐたものこそは、實は長く探してゐた遺失物だつたので、其事を直ぐさまバルバラに告げ、彼れは漸く釣針を手に入れることが出来た。かうして釣針は長兄に返された。

バルバラの復讐

けれども、バルバラはどうかして兄に報復してやりたいと、色々考へた末、祕かに椰子酒の入つた竹籠を、觸れると直ぐ顛覆するやうにヒヤンの寢床の上に吊した。豫期した通りにヒヤンは起き上つて、竹籠は顛覆し、椰子酒は溢れた。バルバラはそこで兄に迫つて、溢れた酒を返してくれと迫つた。ヒヤンは一所懸命になつて酒を掬つ

たけれども、固より其甲斐のあらう筈がない。一滴たりとも集めようと、兄は深く深く地を掘つたら、空に一つの孔が明いた。下には何があるだらうかと、兄弟は異んで長い繩に犬を結びつけて、それを孔から提げ下し、やがて引揚げて見たら、犬の足には白い砂がくつついてゐた。そこで、兄弟は下界に下りてゆく決心をしたが、一部のものは一所に往くことを拒んだ。つる／＼と繩を這つて、三人の兄弟と姉妹の一人とは銘々の犬を従へて下界に降つた。これが世界の發見せられた最初であつた。續いて残つた姉妹が繩を傳うて降りようとすると、下から兄弟の一人が見上げたので、恥かしくがつつて繩を揺したら、天上に残つてゐた人々がそれを曳き上げてしまつた。かうした次第で、三人の兄弟と其姉妹である一人とが、地球の最初の住民となり、また人類の祖先となつたのであつた」。

後半は全く無關係であるけれど、前半は悉くヒコホホデミの神話に似てゐる。かほどの類似であるからには、日本神話を悉く日本で出来たものと解することは出来ない。私は此上いくつかの例を引いて、日本神話の複合的のものであることを論ずる煩を避けたい。私がかゝに例證したバルバラとヒヤンとの話一つだけでも、日本神話が色々の要素から成つてゐることは證明せられ、またそれが存外變形を見ないでゐることも

獨立起原説の崩壊

日本神話は複式

證明せられる。かうした、いくつもの、異つた地方の神話が群島に集つて来て、それらが相互に影響し合つて出来たものが、即ち記紀に現はれてゐる神話である。記紀の神話は、かるが故に、進化した神話であつて、原形を距ること甚だ遠いものであると観なければならぬ。神話の複合進化は、或意味に於いて日本民衆の血液のそれに比例してゐるものとも観られるのであつた。

『古事記』の統計的研究

天地の統計

動物の統計

私は曾て友人らと一所に、『古事記』を分解して一つづつの名詞に分ち、それをいくつかの系統に分類して統計的研究を試みた結果、左表の如き数字を得た。

天	二〇九	海	四四
日	一〇八	島	四三
山	五二	原	三七

これを更に天地の二つに分けると、天が三一七、地が一七六で、天象に関するものが地形に關するものよりも著しく多いので、日本民衆が可也に濃厚な天體崇拜民衆であつたことが知られる。また別に動物について統計を取つて見ると、

兎	一一	鹿	四
---	----	---	---

反神話史實主義

和邇 九 馬 四
猿 八 吳公 四
蛇 八 鶉 四
雉子 七 鼠 三
貝 五 海鼠 三

といふ比率を示し、之を水陸の二つに分けて見ると、統計七十の中、陸棲動物は四十五、水棲動物は二十五(蛇は水陸に等分)といふ結果であるが、それを基として古代の日本民衆が、海よりも陸に親しかつたといふことは出来まい。

神話を神話として扱ふのにはそれ〴〵規則があるけれど、神話を史實の反映として取扱ふことは非常の困難である。神話は所詮神話であつて、史實を暗示するものではないといふ反神話史實主義 (Anti-Euhemerism) は誰れもが承認するところだけれど、しかし、神話が史實と全然無關係でないことも肯定の出来ることである。私は科學を尊重すると同時に、傳統を尊重するところのものであるが故に、民衆が三千年持ち傳へた尊い神話を、出来るだけ科學的に研究して、それを史實と關係せしめたいと思ふもの、一人である。今、ちよつと擧げた數字だの、前に述べ來つた比較だのを覗いた

傳統的 생활史

けれども、そこから日本民衆の傳統的 생활史の幾分かを知ることが出来るやうに思はれる。神話の研究は、史學者に取つて重要な主題であらねばならない。或一派の學者の如く、これを全然歴史の外に置かうとすることは似而非科學的な、誤つた態度といはなければならぬ。

- (一) Lewis Spence: "An Introduction to Mythology," p. 13.
- (二) 一例すれば『日本書紀』の天地開闢の條は、『淮南子』第三卷の天文訓を基として書き直したので、支那の影響を受けてゐるといつてもよい。
- (三) 『日本書紀』卷一。——「古天地未剖。陰陽不分。混沌如鷄子。溟滓而含牙。」
- (四) 『古事記』中卷、應神天皇の條、アミノヒボコに関する記述、及び『日本書紀』卷六、垂仁天皇の條、ツメガアラシに関する記述を参照せられたい。
- (五) 『廣開土王碑銘』参照。
- (六) 『隋書』百濟傳参照。
- (七) 王充『論衡』参照。
- (八) 原文及びローマ字譯は名嘉地宗直氏に據る。現代語譯は私が試みたが、大體は名嘉地氏の註譯によつた。オモロについては伊波普猷氏の『古琉球』を参照せられたい。
- (九) 高木敏雄氏『比較神話學』一二二——一二三頁参照。
- (一〇) アイヌは太陽神を女性としてゐるが、これは日本人の影響を受けたものであらう。

- (一一) Schwaller: "Beschrijving van het stroomgebied van den Parito en reizen langs eenige voorname rivieren van het guld-oost gedeelte van het eiland," vol i, p. 177.
- (一二) Dixon: "Mythology of All-Races," vol IX, p. 167.
- (一三) Jeremiah Curtin: "A Journey in Southern Siberia," pp. 127-129.
- (一四) 『日本書紀』卷二参照。
- (一五) 久米博士『日本古代史』上卷参照。
- (一六) J. G. F. Riedel: "De suik-en kroesharige rassen tusschen Sejeles en Papua," (s-Gravenhage, 1886, p. 217.

第六節 日本民衆と生活理想

強志の北方民衆と、敏感の南方民衆とから成り立つた混血民衆であるが故に、日本民衆にはさうした相反の二つの性質が有たれてゐた。佛教も、儒教もまだ傳はつてゐなかつた時には、彼等は彼等自身の習慣に従つて生活し、彼等自身の理想を趁つて月日を送つた。それらの習慣や理想やは、しかしながら、種族によつて異つてゐるが故に、初めの間は可也にはが／＼な生活が營まれてゐたけれど、國家が成立して政治的統一が行はれ、社會が進歩して人種的混和が計られた後には、それらは段々と接近し、

相反の二性質

融合して、略々日本人に共通なものが出来かけたらしかった。それは彼等の間に、群島を故郷とする觀念が湧いてから遙かの後であつたであらう。

日本人は、概して云へば、積極主義の民衆であつた。彼等の座右銘としてゐた監語は、「天之益人」といふ不思議な言葉であつた。此語は人口は増加してゆくものだから、ふ信念から出来たもので、其信念は日本民衆が傳統的に信奉し來つたところの生々繁殖主義の人生觀の一部であり、それは同時に神話となつても現はれてゐるものであつた。イザナギ、イザナミ以前の神々は、原子と見られるアマノミナカヌシを除外すれば、いづれも皆生産の力を具體化したもので、其力が作用して二神の創造に移つてゆくの『古事記』の創造神話の筋であつた。二神は殆ど全く多産の象徴であつた。天地間の一切現象は皆、二神の生殖作用の結果に外ならなかつた。彼等が生殖作用をどんなに神聖視し、どんなに重大視してゐたかは、創造神話をちよつと覗けば分ることであつた。男性も女性も皆良い兒女を挙げようと願つた。女神イザナミは先づ口を切つて良い男兒を得たいと祈り、男神イザナギは次いで良い女兒を得たいと祈つた。これは日本民衆のいづれもが懐いてゐた考への代表せられたものに外ならなかつた。これ子を産みたいといふ願ひは、やがて生の歡喜、死の嫌忌とならざるを得なかつた。

積極主義の民衆

生産力と其作用との象徴

眞男兒、眞女兒、死と生との争闘

死んだイザナミは滅亡の魔力によつて一日に現世の生靈千人づつ、を縊り殺さうと願へば、生き残つたイザナギは生殖の偉力によつて、一日に千五百棟の産屋を建てようとして願つた。前者は死の追隨であり、後者は生の執着であつた。どうせ不朽でない人生であるが故に、死は彼等の免れないところではあるが、千人死んだら千五百人を産んで、人類の力を此世界に設定して行かうといふところに、生々主義、積極主義の願望が懸つてゐた。此神話は同時に民衆の信仰でもあり、また理想でもあつたが故に、さうした人口増加を人類の本來性質と見て、「天之益人」といふモットオが出来たのに相違なかつた。

個人の力も偉大であるけれども、群衆の力は更に偉大であつた。多勢が共同し、妥協し、一致して仕事を營爲し、共同の利益を増進しようとした古代民衆にあつては、人口の増加は即ち威力の増加であつた。各家族はそれなく、自分達の家族の口数の殖るてゆくの希望し、祝福し、大きな家族は小さい家族の上に矜誇と歡悦との情を有つた。ワニとシロウサギとの説話は、家族の多寡の比較といふことに基づいた力の比較で、後世の兎と龜との競走と同一起原のものであつた。力を數に正比例せしめたところに、古代の群衆生活の状態を窺はしめる或物が潜んでゐるのであつた。産出の力を

群衆の力

ムスビの神

敢爲の精神

重要視し、それを至上神としたのは全く此理由に基づいてゐる。私は産出の力を神格化してムスビの神と名づけ、それを「高」、「神」、「稚」の三つに分けたことを、日本民衆の生々繁殖主義の理想の反映であると見たいのであつた。

新しい土地に新しい生活を營爲することは、どんな原始時代であつても、冒險的勇氣と、忍苦的強志とを要した。人類の壓迫にも増して恐ろしかつた自然の壓迫に對して、古代民衆の努力した努力はすばらしいものであつた。鬱林は彼等の前に横はり、雲霧は彼等の後より襲つた。長江や大洋や高山や平蕪やは、彼等の移動と開拓とを妨げた。けれども、彼等は「天の八重雲をおしわけ、いつの道別きに道別き」て、鬱林を貫き、高嶺を超え、平蕪を過り、長江や大洋やに逢へば、「天の浮橋にそり立たし」てそれを渡つた。夏の暑さにも冬の寒さにも、彼等は決してひるみはしなかつた。彼等はすべての障礙を蹴散らかし、叱り飛ばして、自分達の移動しようとする方向に移動し、開拓しようとする地域を開拓した。そこにはいさゝかの躊躇がなく、逡巡がなく、たい勇氣と忍苦とがあるばかりであつた。暴風よ來れ、猛雨よ來れと、恐しい自然の威力の加ふる迫害を甘受し、それに反抗し、對立して、人間の威力を發揮しようとするのが、彼等の平生の心懸けであつた。人類の迫害に對しても彼等はひるまず

「不朽」と「繁榮」

戦争よりも平和

に之に抵抗し、之を克服し、自分達の行かうとするところに行き、進まうとする路を進まうとした。敢爲の態度、決行の意志は、それらの日の軍歌に現はれてゐる。「擊破して已まう！」といふ強志の肯定的表現は、眞に注目すべき思想表現の一つであつた。かうした理想を、かうした態度で遂げようとするには、搖がぬ岩石と、榮ゆる花纏とに象徴せられる「不朽」と「繁榮」とを併せ得なければならぬ。オホヤマツミが二人の娘をニニギに進めた時の言葉は、かうした二大願望の投影として觀られるのであつた。

古代の日本民衆は、戦争に際しては石棒で敵を撃ちのめさうといふ攻撃的精神を發揮した。けれども、それは必ずしも彼等の本來の希望ではなかつた。北東アジア民衆は戦争を厭うてそれから免れる爲めに、相闘ひ易い位置にある異種族の間に、極めて古い時代から「棄地」——中立地帯のこと——だの、非戦同盟——ヤクト語ではそれをアイエラク（iyelak）といふ——だのを作つた民衆であり、日本民衆にもまたさうした傾向があつたが故に、戦争よりは平和、紛擾よりは無事を愛したに相違なかつた。彼等は、さうした平和を、磐根や木根の立つてゐない平らかな道で代表し、さうした無事を微動だもしない草葉で象徴し、またどちらを向いても霧れ渡つて、清ら

實行主義

かな、爽やかな山川で表現しようとした。

彼等は深く考へるよりも、努めて行ふといふ實行主義の民衆であつた。過去の追想は、未來の憧憬と共に、現前の生活に向つてさほど重要でなかつたが故に、彼等は先づ當面の問題を考へた。今日主義、現世主義は必ずしも日本民衆ばかりではなく、どんな自然民衆の間にも見られる傾向であつたけれど、取り別け日本民衆は現實に即し、先づ食住衣の要求を満たして行かうとした。彼等が神に獻けたところは、即ち彼等がさうありたいと願つたところのものであつた。穂も撓たわに登つた稻の實、それから造つた酒、それらを机に積み上げ、瓶に満たして、飽くまで食ひ、飽くまで飲むことを彼等は此世の幸福であると見た。畑で出来る甘菜や辛菜かなや、海で捕れる大魚小魚を始め海藻の類は、彼等の生命を繋ぐところの大切の糧であつた。さうした農産物、海産物を得る爲めには、彼等は腕を肩まで泥に突込み、脚を股まで泥に突込んで働くことを厭いとはなかつた、浪高く底深き海の底に潜ることをも辭まなかつた。充實を欲した彼等は、それを實現する爲めに忍苦の精神を以て障礙おしほを排き、困難を除くことを辭しなかつた。さうした忍苦の生活を送つたが故に、彼等は一切を忘れて恍惚の域に入るとの出来る不思議の飲料——酒を愛した。酒を飲み飲んで、一群の人々が歡樂の歌を歌ひ、

酒の歡樂

理想の食物

喜悅の踊りを踊つた有様は、岩屋戸籠り神話だけでもそれを窺知する事が出来るのであつた。笑ひを彼等はどんなに美しく、善いものと見たであらう。笑ひの聲は、彼等の常々の憧憬あこがれであつた。笑はん爲めに彼等は働き、いそしんだのであつた。さうした生活理想の神格化されたものがアメノウズメであつた。

理想の住居

飲食に満足を求めたやうに、日本民衆は住居についてもあくがれを持つてゐた。良材に富んだ谿谷からこれと思ふ巨材を伐り出し、其梢と根元とを捨て、中間を搬出し、地の底深く柱を立て、桁け梁はりを葛目つなめで固く引き結び、屋根には萱を葺き並べ、床を張り、窓を開いて、恐しい毒蛇や猛々しい鷲鳥に襲はれることなく、其中で家族と一所に平安の生活を送ることが彼等の願ひであり、望みであり、要求であつた。家の周圍には木や石で垣を造り、四方には門を作つて、自分達の平安の城を他のそれと區別し、様々の災禍のそこに入つて來ないことを祈つた。マジックの偉力を持つた石などが、家の周圍に樹てられたのは、一切の禍災を齎あらす悪靈の侵入を驅攘しようとしたのであつた。

理想の衣服

衣服は大方簡單なもので、常に用ひられたのは麻布であつたが、養蠶の發達、機織の進歩と共に、次第に絹布を用ひることが行はれて來た。しかし、絹布は貴族の一部

が用ひただけで、民衆一般はそれらに大した慾望を懸けなかつたらしい。明るく、輝やかしく、軟かく、粗硬でないものが、感覺の發達と共に彼等に喜ばれたのは十分信すべきことであつた。

理想の食物を食ひ、理想の住家に住み、理想の衣服を着ようと思はゞ、狩獵と漁撈と農業とが圓滿に進行しなければならなかつた。そしてそれを支障なく進行せしめるものは、自分達の努力でもあつたけれど、人爲よりは自然の方が有力であつた。それらの日に於いては、風と水と昆蟲とを恐れなければならなかつた。彼等は颱風期に、大風の吹かないことと、大水の出ないこととを、ワカウカノイ、タツタヒコ、タツタヒメなどの神々に祈つた。

しかも、彼等の願ひは必ずしも遂げられなかつた。大風は作物を荒らし、洪水は田畑を洗ひ、昆蟲は稻の實を食つた。さうした災禍は、しかし偶然ではなくて、自分達の濁穢によるのだといふ宗教的觀念に因はれてゐた故に、彼等は年々二回ほどは自分達の濁穢を淨化する祭式を行つた、六月晦（みづのくろ）と十二日晦（こひのくろ）とに行はれた後世の大祓は、さうした民間祭式の國家祭式に進化したものであつた。こ、から道德が湧いて來た。彼等が濁穢に陥るのは、「天つ罪」と「國つ罪」とを犯すからだと彼等は信じてゐる。

濁穢の淨化

龍田彦
龍田姫

自然の迫害

宗教裡の道徳

同情心の發露

神經質と多血質

た。それらの罪惡は皆宗教的のものであつて、道徳的のものでないといふ學者もあるけれど、或は又それらの日の民衆は全く利己的で、少しも愛他的なところがなかつたといふけれど、畔を破り、溝を埋め、樋を壊つとを罪惡とするのは、それが共同の利益を完うしようといふ要求に背くものであることを知つてゐたからで、こ、に同情心の發露が見られるのであつた。動物の皮を生きながら剥ぎ、或は逆に剥ぐことを罪惡としたのも、それらを動物に對する慘虐と考へたからであつた。原始人の間に多く見られる母子近親結婚を忌避する觀念の發生しつゝ、あつたとも、それを罪惡としたことによつて窺ひ知ることが出来る。日本民衆は比較的に近親結婚を忌まなかつたやうであるが、かうした忌避の傾向のあつたことも事實で、それが自發的であつたか、或は支那思想の影響であつたかは分らないが、多分、文化の進歩と共に忌避の觀念が自然に起りつゝあつたのであらう。

倫理的罪惡と、宗教的濁穢とを混同するほど原始的な生活を送つてゐた彼等でありながら、日本民衆は生活を享樂しようとする觀念から、せつせと働いて、積極的に樂經濟を追求する一方、臆病と思はれるまで消極的に濁穢から身を淨めようとしたことは、今日の私達が想像し盡くされぬ不思議な心的現象であつた。彼等の間には彼等を

周匝する悪靈を恐怖する感情が餘程濃厚に漲つてゐたらしい。家にゐる時は家の周圍に悪靈が満ちて居り、森に行く時は森の中に、河に行く時は河の中に、それらの悪靈がゐる彼等を待ち伏せしてゐるやうに思ひ込んだ。海の悪靈はどんなに漁撈に従事する彼等を脅したであらう。山の悪靈はどんなに狩獵に赴いた彼等を恐れしめたであらう。かうした悪靈の多數を認めて、それらの前には意氣地のなかつたやうに見える彼等も、宗教上では神經質的なのに反して、實際生活上では多血質的であつて、可也に豪壯雄大な思想を抱いてゐた。かうした矛盾は今日から解釋がつかぬやうに思はれるけれど、彼等は確かにさうした相反の二性質を同時に持つてゐたらしい。

自信と勇氣とは、恐らく宗教的儀式の後に起つたのであらう。即ち彼等が濁穢とするところの罪惡を、禊祓の形式で淨化してしまつた時などに、彼等は其剛健性を發揮して敢爲勇猛の活動を活動することが出来たのであらう。清淨！それをどんなに彼等が愛したかは、『大祓詞』を一讀すれば直ぐに分ることであつた。しかし、「清淨」は目的ではなくて手段であつた。それに依つて彼等は彼等の理想を實現し、要求を満足せしめようとしたのであつた。

物は轉ずる。悪靈を見續けた眼の底から恐怖の色が失はれた時、そこには勇氣の光

「清淨」は手段

勇氣の光り

生活の轉換

國家觀念の發現

りが輝いた。本來、日本民衆は無慾であり、恬淡であり、今日を面白可笑しく暮らさうとする今日主義、現實主義の民衆であつたが故に、質朴はそこから生じ、單純も同時にそこから湧いた。質朴で、單純なものは、回顧から、煩悶から解放せられて、清明の心持で日常生活することが出来た筈であつた。清明の心持は即ち勇氣の源泉であつて、率直と忍苦と敢爲とに彼等を導いた。深く考へると、臆病になるのが人生であるが、彼等の人生觀は單純樸素であつたが故に、勇氣を以て邁往突進することが出来た。可也な危險も避けられはしなかつた。可也な暴舉も戒められはしなかつた。罪が禳はれて、身が清らかになつてゐると自らを信じた時には、どんなことをも彼等はしかねなかつた。生活の向上は、さうして彼等によつて計られたのであつた。無限の發展に向つて、彼等が固い歩武を踏み初めたのは、國家が成立して小群團の間の小戦闘が熾み、それらに費された勞力と時間とが生産の爲めに費され得る群團的農業生活が營まれかけた時であつたらう。日本國家の民族としての群團的憧憬さへも、それらの日には既に芽を萌いてゐた。

皇室と國家とを一致するものと見た宗教的觀念は、愛國心と尊皇心との一致を惹起し、此國家を榮えしめることは、此國君を榮えしめるとであるといふ考へが、一部の

有識者の間には持たれてゐた。農民の多くはたゞ働いてゐた日にも、漁獵者の大多数がたゞ漁獲の多からんことをのみ願つてゐた日にも、貴族らの中にはかうした抽象的問題についても考へてゐたであらう。其考へは、或は一般民衆と無交渉であり得たかも知れないが、しかし、それが次第に波紋を描いて、圓く、大きく擴がつて行く時が來た。それが即ち政治的統一がついた時で、國際的に國家が認められた時であつた。私の所謂「大和時代」は、血液を基調とする群團、即ち氏族が、次第に統一せられて行つた時代であつた。氏族が統一せられてゆくといふことを、心理生活の方面から觀ると、血族愛を社會愛に擴張してゆくといふことになる。自然の寵兒であつた朴茂の日本民衆が、血液の群團の幸福の追求から眼覺めて、國家の團結の光榮の享受を求め始めたといふところに、此時代の生活理想の進歩の終點が横はつた。其終點に漂つてゐた理想の姿は、可也に廣く、可也に大きいものであつた。私は今、『祈年祭祝詞』^(二六)の中から一節を現代語に譯して、此節を結ぶと同時に此書をも結ぶとする。蓋し此祝詞は朝日のさし昇る時、莊嚴の儀式の間に天皇が讀ましめられるもので、大和時代の終末に於ける民族としての日本民衆の太陽主義の生活理想を明瞭に告白したものであるからだ。

血族愛から
社會愛へ生活理想の
縮圖

「生國魂の神よ、足國魂の神よ。天皇の治められるこれらの島々は、蝦蟇が歩き得る狭さの限り、潮の流れる廣さの果てまで、どんなに小さい島でも洩れなく、狭い國は廣くなり、峻しい國は平かになるやうに、皇祖皇宗があなた方に委托せられたものである。……殊に伊勢に鎮座せられる天照大御神よ。あなたが見張つてゐる國々は、天の果て、地の果て、青雲の棚曳いてゐる果て、白雲の垂れ伏してゐる果て、棹櫂の乾く間もなく、漕ぎに漕いで船が進み得る大海の果てまで、荷造り固く磐の根木の根を踏み裂いて、馬が進むとの出来る長道の果てまで、海には船を浮け連ね、陸には馬を驅り續けて、あなた方の委托された通り、狭い國は廣く、峻しい國は平かに、遠い國は綱を懸けて引き寄せるやうに、天皇は、今、諸國から貢獻した初穂を、皇祖皇宗、あなた方の大前に供へられる。此横山のやうな供へ物をあなた方は十分召し上つて下さい。残つた分は天皇が召し上られるでせう。どうぞ、此天皇の御世を、堅い磐のやうに堅く、變らぬ磐のやうに變りなく、長く、祝福し給うて、繁榮と威嚴とを與へて下さい。皇祖父よ、皇祖母よ。鶴が水にもぐるやうに頭を下けて皇孫である天皇は、豊富な供へ物をあなた方に獻けて、あなた方の功德を讚美し、且つあなた方の冥護を祈願せられる。」

(一)『六月晦大祓詞』——「國中曾成出此。天之益人等我。過犯雜々罪事。……。」
(二)『古事記』上卷。——「伊邪那美命。先言阿那邇夜志愛哀登古哀。後伊邪那岐命言阿那邇夜志愛哀登古哀。」

(三)同上。——「伊邪那美命言。愛我那勢命。爲如_レ此者。汝國之人草。一日絞_二殺千頭_一。爾伊邪那岐命言。愛我那邇妹命。汝爲_レ然者。吾一日立_二于五百產屋_一。」

(四)同上。——「汝者隨_二其族在_一。悉率來。自此島至_二于氣多前_一。皆列伏度。爾吾踏_二其上_一。走_レ乍讀度。於是知_レ與_二吾族_一孰多。」

(五)同上。中卷、神武天皇の條。——「久夫都々伊。伊斯都々伊母知。宇知_二且斯夜麻牟_一。」
(六)同上。——「天神御子之命。雖_二雨零風吹_一。恒如_レ石而堅不_レ動坐。……如_二木花之榮_一榮坐。」

(七)『大股祭詞』。——「磐根木根乃立知。草能可_レ岐葉言止_レ氏。……。」
(八)『遷_二却崇神_一祭詞』。——「四方_二見露_一。山川能清地_二遷出坐_一氏。……。」

(九)『祈年祭詞』。——「初穗_二千穎八百穎_一奉置_二氏_一。處門高知。腰腹滿_二雙氏_一。汁_二穎_一稱辭竟奉_二奉_一。」
(一〇)同上。——「大野原_二生物者_一。甘菜。辛菜。青海原_二住物者_一。鰭_二廣物_一。鰭_二狹物_一。奧津藻菜。邊津藻菜_二至_一氏。……。」

(一一)同上。——「手_二肱_一水沫盡垂。向股_二泥盡寄_一氏。取作_二奧津御年_一。……。」
(一二)『大股祭詞』。——「波府_二蟲_一無。……飛鳥_二乃_一禍無。堀_二堅_一柱。桁梁。戶_二欄_一乃_二錯_一。動鳴事無_二。引結_二葛目_一能_レ緩_レ比。取_二葦_一草_二乃_一喚_レ無_二。御床_二都_一比_二佐夜伎_一。夜女_二乃_一伊須々伎。伊豆都志伎事無_二。」

無_二久平_一安_二久奉_一護留。……。」

(一三)『御門祭祝詞』參照。

(一四)『祈年祭祝詞』。——「御服者。明妙。照妙。和妙。荒妙。稱辭竟奉_二奉_一。」

(一五)『廣瀨大忌祭祝詞』及び『龍田風神祭祝詞』參照。

(一六)『祈年祭祝詞』參照。此現代語譯は甚だ拙く、或は多少意味の取り違へもあらうけれど、意味の暢達を第一義としたものとして、讀者諸君の寛大な許容を請ひたい。

大和時代 (完)

大正十一年十一月廿二日發行
 大正十一年十一月廿五日發行
 大正十四年九月廿八日訂正再版發行

國民の
 日本史
 大和時代
 正價金參圓

編輯兼發行者

早稻田大學出版部

右代表者

東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸屋五十八番地
種村宗八

印刷者

東京市牛込區板町七番地
本間十三郎

發行所

東京市牛込區早稻田
板橋東京一三三番

早稻田大學出版部

日清印刷株式會社印刷

早稻田大學出版部發行

東京牛込振替 東京壹壹貳參番
大阪六八九〇番

圖書總目錄及新著月報進呈

哲學概論	文學博士 桑木 嚴翼 著	參六判函入 五百四拾頁	郵壹圓八拾錢
普通心理學	文學博士 金子 馬治 著	四菊判上製 四百頁	郵貳圓五拾貳錢
倫理學	早大教授 杉森孝次郎 著	四六判函入 四百五拾頁	郵貳圓五拾貳錢
サマル人口理論 <small>第七版譯</small>	早大講師 佐久間 原 譯	四六判函入 四百五拾頁	郵貳圓八拾貳錢
隨筆 賴山陽	市 島 春 城 著	參六判函入 天金七百頁	郵貳圓八拾貳錢
文化人類學	早大教授 西村 眞次 著	四六判函入 參百貳拾頁	郵貳圓八拾貳錢
社會學	マツクイワー原著 井 上 吉 次 郎 譯	四六判函入 貳百七拾頁	郵壹圓八拾錢
創造的進化	金子 當馬之助 共譯	七菊判函入 七百頁	郵參圓八拾錢
我等は如何にして自己を救ふべし可	エヒクテアトス教説 中 島 祐 神 譯	四六判函入 五百頁	郵貳圓五拾貳錢
社會問題概論	早大教授 安部 磯雄 著	四六判上製 八百頁	郵四圓八拾錢

505
414

終